校長室だより～燦燦～ №２５６

縁がつながる

2020.12.18

人生は縁である。５校目の〇〇中学校の１年目に、県教育センターの中学校経験者研修Ⅱ（１０年研）国語講座の教科相談員となった。当日、緊張しながら県教育センターに行ってみると、他の教科相談員は、指導主事と校長、教頭であった。教諭は私だけだった。「これはやばいところにきてしまった。やめればよかった」と思ったのだが、来てしまった以上やるしかない。一つの４人グループを担当し、指導案作成や授業づくりのアドバイスをする役目だった。アドバイスできるのは夕方の１７時までだったが、翌日行う模擬授業の指導案は完成していなかった。それでも、私は帰るしかない。後ろ髪を引かれる思いでセンターをあとにしたのだった。

その日の夜に研修者からお電話をいただき、さらにアドバイスを重ねた。研修者４名は、ずっと指導案作成を続けたそうである。翌日の夕方には、「無事に模擬授業ができました」というお電話をいただいた。これが教科相談員１年目だった。

翌年も教科相談員の話がきた。また同じように４人グループを担当した。限られた一日の中で、いろいろな話をした。すると、ある研修者が「高澤先生の授業を見に行ってもいいですか」と言い出したのである。それまで偉そうに話していた私は嫌とも言えずに、とりあえず承諾したのだった。問題は、研修者の所属校の校長先生が、私が勤務する〇〇中学校に行くことを認めてくれるかどうかである。本人たちの行動力が勝ったのか、校長先生の理解があったのか、とにかく３人の先生方が、遠路はるばる私の授業を参観にきた。それも、頼んでもいないのに、私の授業をビデオに撮り、ＤＶＤにしてプレゼントしてくれたのである。私は３人の先生方に、製本された学級通信『薫風』などを差し上げた。

次の年も教科相談員を引き受け、３年連続で中学校１０年研の国語講座に関わることになった。中には、今でも交流が続いている先生方もいる。研究授業をやる際に、メールで指導案のやりとりをしている先生もいる。また、私の授業を見にきた先生の一人が、中教研県大会の授業者になり、何度も指導案のやりとりをしたこともあった。その先生の学校に、たまたま図書館教育研究大会で伺うことがあり、久しぶりにお会いすることができた。すると、その先生は、『薫風』や私が提供した資料が綴じられたファイルを持ってきて私に見せるのである。ありがたいことである。

３年間にわたり教科相談員の機会をいただいたことで、人を指導するやりがいやむずかさしさ、教えながら共に成長していける喜びやおもしろさを学ぶことができた。この３年間は私が授業改革に取り組み、様々な実践を重ねている時期だったので、まさにベストのタイミングだったと言える。

教頭となり、もう県教育センターとの縁も切れたかと思っていたところ、県教育研究発表会で私が教頭を務める中学校が発表することになった。南会津から推薦されたのである。普通ならば、研修主任が発表するところではあるが、諸事情により教頭である私が発表することになった。それまで１回しか県教育研究発表会に参加したことがない私ではあったが、パワーポイントのデータと資料を作成し、当日の発表を迎えた。発表は、それなりに終えることができた。この時点では、まさか自分が、次の年から県教育センターに勤務することになろうとは思いもよらなかった。

後で考えてみると、最初からこうなるシナリオだったのか、ということがよくある。このことを“縁”というのであろう。不思議なことに縁というのは、次から次へとつながっていくからこれまた不思議である。